

International Student Energy Summit (ISES) 2015 に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

6 月 10～13 日、インドネシア・バリにおいて、International Student Energy Summit (ISES) 2015 が開催された。ISES 2015 は、カナダ・カルガリに本拠を置く NPO、Student Energy と今回のホスト国、インドネシアのバンドン工科大学が共催する国際会議である。今回の会議には、世界 90 カ国以上から約 600 名のエネルギー問題に関心を持つ大学生・大学院生を中心にした参加者（登録ベース）があり、10 日の Opening Ceremony に続いて、5 つの Plenary Session、4 つの Parallel Session 等において、世界各国から招待された専門家、有識者等によるパネル討論を基に、活発な議論が行われた。

ISES の第 1 回は、エネルギー問題に関心を持つ学生のイニシアティブを基に、2009 年にカルガリで開催され、それ以降、2 年に一回のペースで開催されている。第 2 回は 2011 年にバンクーバー、第 3 回は 2013 年に Trondheim (ノルウェー)、そして第 4 回がバリで開催されるに至った。今回の会議において度々言及された通り、世界の将来は若い世代の手中にあり、その意味で、エネルギーそして環境問題に対して、将来のリーダー候補となる世界の学生が高い関心と問題意識を持つことは極めて重要で有意義である。その意味で、若い世代がエネルギー・環境問題に関して、正確な知識を持つことがまずは最も重要な基本になる。

本会議におけるテーマの選択、そして議論の内容から筆者が感じたことは、参加した若い世代・学生の関心は、エネルギー・環境問題に関する高い理想・期待と関連し、再生可能エネルギー推進、地球温暖化問題への積極的な取り組み、先進的・革新的エネルギー技術の開発と普及等にあったということである。また、不公平是正や均衡のとれた社会発展という観点から、世界に多数存在する低所得で近代的エネルギーへのアクセスを持たない人々への対応、あるいは「エネルギー貧困」問題への対応についても、大きな関心が示されたところも筆者の印象に残った。

筆者は、これらの問題について、若い世代が高い理想と目標を掲げて取り組むべきと考えるのはいわば自然であり、かつ望ましいことであると感ずる。と同時に、理想と目標を正しく設定するためには、現実社会の問題に対する正確、客観的、中立的な情報と知識が重要である。それが無ければ、時には理想でなく夢になり、また誤った方向での理想・目標に走ることも起きかねない。

再生可能エネルギーの推進、温暖化への対応、そしてエネルギーミックスの問題等については、政策担当者、産業界関係者、専門家だけの議論でなく広く国民全体の理解が重要である。その点では、将来を担う若い世代の役割は極めて重要で、小論「国際エネルギー情勢を見る目 (205)」で取り上げたテーマと関係するが、若い世代が「Energy Literacy」を向上させ、その上で理想と目標に邁進していくことが望まれる。まさに ISES はそのプラットフォームとしての役割が期待される場所である。

その意味では、今回の会議では高い理想に関わる議論と同時に、最近の原油価格乱高下、その背景要因としてのシェール革命、そして化石燃料の重要性等、現実の問題を取り上げたセッションや議論も実施されたことは有意義であった。学生からの質問では、化石燃料の将来そのものや化石燃料に依存することに対する疑念や懸念が度々示されたが、多くのスピーカー・パネリストから、化石燃料の資源量、経済性、技術開発、利便性に関する現実に立脚した説明と議論があり、Literacy 向上の一助になったのではないかと感じた。なお、化石燃料の中では最もクリーンな性質を持つガスに大きな関心が寄せられ議論の中心となり、特にシェールガス開発の功罪に関して、パネルとフロアで活発な意見交換が行われた点が印象に残った。

筆者も参加した「Emerging Asia」という Plenary Session では、アジアのエネルギーの将来がどのような方向に向かうべきかという「理想」に関わる議論と、現実にアジアがどのような深刻なエネルギー問題に直面し、それに対処しているか、という議論が共存する形で行われた。会議がインドネシアで開催され、国際エネルギー市場の重心がアジアにシフトしていく中で、アジアのエネルギー問題がこの会議で大きく取り上げられることとなった。若い世代の中でもこの問題が関心事として重要性を増していることの反映でもある。アジアのエネルギー・環境問題についての、「将来」と「現実」のギャップを繋ぐブリッジとして技術への期待が示され、省エネ、クリーンコール技術、再生可能エネルギーなどでの様々な可能性が議論された。その中で、一つ興味深かったのは、先進技術の普及に関しては、エネルギー協力が重要であるが現実に様々な制約・課題がある問題で、学生からの質問もそれに関連したものが多かった点である。特に国際協力を進める上で、現在のアジアにおける地政学的な緊張関係がどのような影響を及ぼすか、という趣旨の質問も複数寄せられ、ある意味で「厳しい現実」を踏まえた問題関心が存在することも印象的であった。

全体として、若い世代の Energy Literacy 向上にとって極めて有意義な議論が展開される会議であったが、唯一気になったのは、問題関心がやや環境問題に重心を置きすぎ、特にエネルギー安全保障の問題があまり前面に出なかったことである。エネルギー安全保障は複雑な問題を内包しており、理解が容易でないところもあるが、エネルギーチャレンジの中で最も基本的重要性を持つ。その点、まさに 3E のバランスをとった議論による Literacy 向上を図っていくことが若い世代のためにも、世界の将来のためにも重要であろう。

以上